



TITLE:

「物性論研究」(1949年～1957年)  
の思い出(第I部:「物性論研究」及  
び「物性研究」編集者の回想記  
,<特集>「物性研究」10周年記念)

AUTHOR(S):

小島, 忠宣

---

CITATION:

小島, 忠宣. 「物性論研究」(1949年～1957年)の思い出(第I部:「物性論研究」及び「物性研究」編集者の回想記,<特集>「物性研究」10周年記念). 物性研究 1973, 20(3): 74-76

ISSUE DATE:

1973-06-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88649>

RIGHT:

特集：「物性研究」10周年記念

大に発行が移り、山本常信君らが中心となった。

現在の「物性研究」は、より歴史の浅い「素粒子論研究」の存続に刺激されたものであるといえよう。30年間の時の移りに従って、私個人の関心も変り、今日では「物性研究」からはいささか遠い所にいる。

以上、いささかぼけた記憶を辿って「物性論研究」、「物性研究」について述べた。

## 「物性論研究」（1949年～1957年）の思い出

東北大理，物理 小 島 忠 宣

「物性論研究」は、かつて東大物理教室で編集されていて、それが一応12号（1948年9月）をもって終刊とすることになったが、当時の出版事情より見て、この種の比較的手軽に、しかもスピーディーに発表できる雑誌はやはり必要だということで、13号（1949年2月）から阪大の永宮研で復刊させようという風に話がまとまったようである。

そこで、私が永宮教授から編集を命ぜられる破目になった次第であるが、当時はまだ戦災後の復興途中のこととで、まず適当なプリント屋を探すことが一苦勞であった。阪大に近い焼ビル内に開店したプリント屋に16号までやらせてみたものの、毎号印刷費の値上げを要求されるので、新たに新聞広告などを頼りに、最もよい条件で印刷を引受けてくれる店を、方々探す必要に迫られることになった。こうして結局17号（1949年8月）から、私が阪大から市大に移る直前の106号（1957年3月）に至る7年半程の間、平和プリント社にやって貰うことになった次第である。幸い同社の松本社長はこの種の学術出版に並々ならぬ情熱と理解とを示され、当時としては採算のとれる限度に近い低価格で引受けて下さった。永宮教授からは、「助手の仕事の一部としてやるように」ということで、時々会計報告をする他、編集から会計まで一切を私に一任された格好になり、はじめのうちは原紙の校正が最も手数のかかる仕事であった。しかしそれも一年位のことで、印刷所の方で、「物性論研究」のガリ切に、当時大阪でトップクラスの腕をもつ古橋氏を専任にし、更に、数学、物性の記号、用語にある程度理解のある、

旧海軍参謀の岡田氏を専属の校正係として入れることになり、編集面での私自身の仕事は、原稿の誤字訂正とか、判読困難な文字、記号に手を加えること位で、労力はかなり軽減されることになった。しかしそれでも印刷所からは、原稿に文意の通じないところがあるとか、文献番号が一致しないとかで、屢々問い合わせがあり、また、原稿を是非今月号に間に合わせてくれとか、印刷中の原稿を至急改訂してほしいとかいう、投稿者の注文があったりして、度々印刷所へ足を運ばねばならないことがあった。会計の方は全く事務的に処理すればよかったので、たまには手違いで購読者に御迷惑をおかけしたこともあったかとは思いますが、まず殆ど苦労はなかったように思う。ただし通産省関係の研究所から、「何月何日に代金を支払うから印鑑を持って出頭せよ」という通知が来たのには閉口した。出頭しないと支払わないというから、こういうところは、以後こちらから購読を願い下げにして貰った。

さてそのうちに、「物性論研究」はジャーナルとかプロGRESSに出される論文のプレプリント的役割が濃厚になり、投稿数も次第に増加して、常時100頁から200頁にもなるようになった。そして74号あたりからは、現在の「物性研究」誌に見られるようなニュース欄を設けて、いろんな通知や報告をも行なうようになった。雑誌が厚くなると、今後は荷造や発送が面倒な仕事になり、当時永宮研に居られた皆さんには随分手伝っていただいた。その中には望月さん、金森さん、守谷さんも居られる。

物性論研究の投稿文には、いずれ英文にして発表されるかなり整ったものの他に、試論とか、コメントに類するものも相当数あり、特に調査した訳ではないが、大体の感じとして、半数近くが後日英文論文として出されたように思う。しかし、多分著者の無精か何かのせいで、かなりすぐれた論文でありながら、手を加えて外国語に直そうとする努力を放棄し、外国人から見れば、徒らによい論文を埋もれさせてしまったようなものも、中にはあった。1956年に永宮教授が、「物性論研究」を廃刊にしてはどうか、という意見を出されたことがあったが、（1954年にも似たようなことがあったが、このときは継続すべしという意見が圧倒的多数であった）その理由はまさに上記の点にあったように思う。

話が前後するが、41号（1951年8月）から、投稿規定と会則とを設けて毎号巻末にのせることになった。この文章は私が作ったもので、ただ英文アブストラクトをつけることをおすすめるという項だけ、永宮教授が加筆された。当時、海外から、時々

「物性論研究」にのった特定の論文の内容を知りたいとか、中国からはまとまって何部かの注文があったりして、その処理に困り、後者の方はお断りし、前者については著者に照会状を転送するという風にした。英文アブストラクトは、もし私の記憶違いでなければ、化学の千原氏から、英文アブストラクトがあれば Chemical Abstract に転載することが可能だから、とのお申し出があつて、上記のコメントをつけられたものと思う。しかし現実には、英文アブストラクトをつけた投稿者はごく少数であつた。今日の「物性研究」の投稿論文は、殆ど物性基礎論に近いものに限られているが、昔の「物性論研究」の投稿者は大変巾が広く、今日のいわゆる物性物理の他に、J.Chem. phys. にのっているような性格の化学畑の人からの投稿文も少なくなかった。今日の物性論と違って、当時はまだそれほど専門分化が行なわれていなかったもので、どの論文も読んで一応は理解でき、私にとっては、どこにどういう問題があるかを知るには、大いに有益であつたように思う。

投稿論文は、理論と実験とに分けると、ほぼ5：1程度の割合であつた。実験の論文が比較的少ない理由の一つは、現在我々の手元に集まるプレプリントが、実験よりも理論の方が圧倒的に多いのと多分同様であつて、実験では実験事実をほぼそのまま報告すればよいのに反し、理論では、基本的な考え方、扱い方など他人の批判をうける必要性が、より大きいためと思われる。「物性論研究」の発行部数は、はじめは360部でその後次第に増加し、終り頃には500部刷っていたかと記憶している。当時の物性論研究者の数は、正確には把握し難いけれども、物性論の意味を多少広義に解釈して、高分子化学なども含めたとしても、まず1000名程度かと思われるので、「物性論研究」の利用率はかなり高かつたと見てよからう。

古い「物性論研究」を引張り出して眺めていると、いろいろ他にも思い出すこともあるが、一応この辺で唐突ながら筆を措くことにしたい。